連載

司祭館の窓から③

司祭館の窓から……

山元（やまもと） 眞（まこと）（行橋（ゆくはし）教会主任司祭／福岡教区）

山元（やまもと） 眞（まこと） 神父

この教会に赴任してきた当初は司祭館の窓からは何も見えなかった。何も……。そう、この司祭館はすべての窓が磨（す）りガラスで、しかも網が入っている頑丈なものだった。それだけではない。窓の外にはアルミ製の格子までついている。……というわけで、内から外は何も見えない。つまりは、見たい時には窓を開けて見ればいいということになる。安全のためとはいえ、息が詰まる思いをした。もちろん、外から内も何も見えない。見えないだけでなく、一種の疎外感さえ与える。

窓の一部を透明のガラスに換えた。それだけで素晴らしく解放感を味わうことができるようになった。司祭館の外に出るといろんなものが見え、いろんなことを感じることができる。教会の敷地の外に出ると、もっといろんなものが見えて、感じることができる。外に出ると、内からは見えないものがたくさん見えてくる。「教会」ってところは、いつも内側から外だけ見ているような気がする。

見る立場、どこに立って見るかによって、見え方が違ってくる。

三年前の聖週間。イエスの復活祭を祝う日曜日の二日前。聖金曜日に教会は主の受難を記念する。主イエス・キリストの受難物語が荘厳に朗読される。劇のように朗読の配役が決められる。福音記者役やペトロ役、ピラトの役や会衆の役、キリスト役は決まって司祭がする。その日も祭服を身にまとい、祭壇の中央でキリスト役を務めた。キリストの「台詞（せりふ）」は少ない。他の人々が朗読する言葉を追って受難の出来事を黙想する。聞いているうちに「どこかがおかしい……」と思い始めた。司祭はキリストの「役」を務めているが、キリストの姿はこんなものではない……。

ふだんの日曜日は、福音が読まれた後、司祭は説教をすることになっているが、聖金曜日は「主イエス・キリストの受難」の後は、必要ならば説教をしてもいいことになっている。つまりは「受難物語」に司祭が言葉を付け加える必要もない、ということであろう。

受難物語が朗読された後「今日は受難の朗読の間に気づかされたことを態度で現してみます」といって祭壇から降りた。祭壇と信者席の間に少しスペースがあるが、そこの床に祭服を着たまま這（は）いつくばった。信者の皆さんは何が起こったのかとわたしを見ようとした。上から見下ろしたその視線を感じながら、床に這いつくばったままマイクを通して「イエスはこのように

いちばん低いところまで来てくださった。だから、いちばん低くされた人の苦しみ、悲しみ、きつさが分かる。だから……わたしたちは救われている」と言った。

「主の受難」の典礼が終わった後も、そして今に至るまで、この出来事についてほとんど誰も語らない。しかし、その日を境に教会共同体の雰囲気が変わったような気がしている。

視点を変えると、見え方も違ってくる。そして、行動も変わる。

この「低みからの視点」がイエスが示した「救い」を実現していくのではないだろうか。どうしたら救われるのか。イエスの教えは単純なものに思える。「わたしが愛したように、互いに愛し合いなさい。わたしは仕えられるためではなく、仕えるために来た。互いに仕え合いなさい。赦し合いなさい……。」

司祭の司牧も宣教も、教会での諸活動も、すべてこの「視点」から行われると救いが実現していく。子どもとのかかわり、夫婦のかかわり、親子のかかわり、司祭と信者のかかわり、信者同士のかかわりも……つまりは、すべての人と人の間のかかわりがこの「視点」からなされるならば、そのかかわりの間に小さな（大きな？）救いが実現していく。こうして、ひいては「神の国」が実現していく。

このような「視点」から考えてみると、わたしたちのさまざまな行動のおかしいところが見えてくる。教会では「低みからの視点」ではなく、いたるところで上から見下ろしている視点があるのではないだろうか。あまりにも教えようとする姿勢。イエスは「わたしに学びなさい。そうすれば安らぎを得る」と言われた。教会は教えるところではなく「共にイエスに学ぶ」ところではないだろうか。

律法主義的な生き方からの解放。弱くされた人たちに近づくこと。律法を守れない人たちへの思いやり。教会が理想としている生き方ができない人への理解。これらのことこそ福音的な視点ではないかと思う。具体的に……主日のミサに来れない人、教会の交わりから遠ざかって（遠ざけられて？）いる人、病気の人、さまざまな障がいを持っている人、生活の労苦にあえぐ人……そのような方がたこそ大切にされなければならない。教会によく来ているからということで大切にされたり、教会に来ていないから適当にあしらわれる、というようなことがあってはならない。例えば誰かが亡くなった場合、目に見えて教会とのかかわりが薄いように見える方がたこそ、丁重にもてなされなければならないと思う。

司祭館だけでなく、教会自体が磨りガラスで覆われているような気がしないでもない。「開かれた教会」という表現があるが、この表現さえもキリストの「視点」から見れば傲慢にさえ思える。上下の視点から見るのではなく、上下のない平面の視点から、もっとも低い、これ以上低いところのない「場」からの視点、これが真の救いをもたらすと思う。四旬節はこの視点に立ち戻る時だと思う。

株式会社 吉本洋紙店

本　店　〒104-0041　東京都中央区新富2-7-4　☎03(3551)4141㈹/2143　FAX03(3551)3939
厚木支店　〒243-0807　神奈川県厚木市金田1017　☎046(223)6931　FAX046(223)6930